法学部

「やる気応援奨学金」リポート

Vol. 93

フランスに留学し会話力磨く オランダでは国際機関を訪問

法学部国際企業関係法学科三年　小林　麻美子（私立中央大学杉並高校）

留学のきっかけ

私が留学したいと考えるようになったのは大学一年の夏頃で、きっかけは第二外国語の授業で受講した仏語の授業やゼミの活動だった。受講していたインテンシブコースの授業では、特に発音やリスニングに力を入れた、実践的な仏語の学習が出来、フランスの音楽や映画、文化などにも触れる機会もあったため、フランスに興味を持ち、仏語を使って現地の人々と交流したいという思いが生まれた。ゼミ活動では国際機関について学ぶ機会があった。海外の問題にもかかわれるような仕事に興味を持っていた私にとって、国際機関の仕事は魅力的で、国際機関で実際に働く方にどのような思いで働いているのか、どのような時に仕事の面白さや難しさを感じるのかなど、直接インタビューをし、自分の将来の夢を具体化していく糧にしたいと考えた。

奨学金認定までの道のり

フランスに留学したいという気持ちが固まったものの、計画から実現までに約一年間の年月が掛かった。というのも、現地での行動スケジュールから、受け入れ先の学校との連絡、宿泊の場所の決定、航空券の手配、国際機関訪問のためのアポイントメントのメール、予算まで、何もない状態からすべて自分で決めるのが、エントリーするための必要条件であったからだ。こうして、行動計画を立てるための長い下準備が始まった。

活動内容は大きく三点である。一点目は仏語をスキルアップさせるため、語学学校に通うということ。留学先の都市は南仏に位置するニース、学校先は少人数制でコミュニケーションに重点を置く語学学校。二点目は国際機関を訪問すること。ヨーロッパに所在する約一〇の国際機関にアポイントメントのメールを送った。幸運にも、オランダのデンハーグの国際機関とアポイントメントが取れた。三点目は長期滞在を考慮した下準備。機会があれば長期滞在したい思い、まずは現地の文化、習慣、考え方を知るべきだと考えた。そこで、現地でフランス人の家庭にホームステイさせてもらうこと、芸術に触れることの出来る美術館巡りをすること、を行動計画に盛り込んだ。だが着々と行動計画を決めていくにつれて、ある不安が出てきた。自分の現時点の仏語の能力についてである。目標は、日本に帰国するまでに自分の言いたいことを仏語で伝えられるレベルにすること。しかし日本では仏語を日常的に使う機会はほぼないのが現状だ。そこで仏語検定の取得や他学部履修など、二年時前期は仏語の授業を週五回履修した。留学の資金が膨大に掛かる問題も出てきた。夏のお盆の時期に日本を出発する計画を立てていたため、航空費だけで奨学金が消えてしまうほどの費用が掛かることが予想されたのである。そこでアルバイトの掛け持ち、長期の休み期間の派遣の仕

事など、約一年の間、留学の資金集めにも頑張った。そして二〇一二年の夏、ついに奨学金が認定された。

語学学校

今回、私はニースで五週間の語学留学をした。商店街、海岸、旧市街からも近いこと、約二五カ国の生徒が参加しかつ日本人留学生が少ないこと、少人数制でコミュニケーションに重点を置いた授業が受けられること、そして学校側が主催するアクティビティーがあることに魅力を感じたのである。

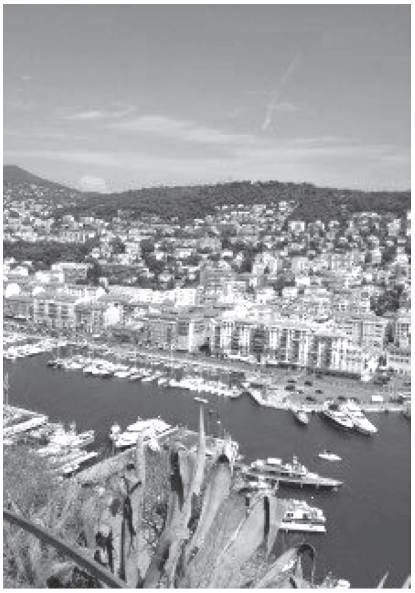
語学学校のクラスメートと

しかし最初の二週間の学校生活は、予想以上につらく、挫折の毎日であった。仏語を聞き取れなかったのである。クラスメートは私以外、ヨーロッパ圏の生徒。リスニング力には優れており、授業に伸び伸びと参加していた。その一方、私は先生の話すスピードが速過ぎて付いていくことが出来ない状態で、自らのコミュニケーション能力の低さに、心が沈む思いであった。しかし、先生も友達も私が理解出来るまで丁寧に教えてくれたため、クラスの雰囲気にも少しずつ慣れていき、だんだんと授業を楽しめるようになった。

授業内容は、午前中（月―金）は文法、ボキャブラリーが中心で、午後（週三回）は仏文化・慣習、考え方を学ぶ、決められたテーマに沿って自国の文化を紹介するなど、コミュニケーションに重きを置いた。中でも印象に残った授業は、街で住民に聞き取り調査を行い、特にニースの魅力について知るというものだった。場所は小さなお店が立ち並ぶ、旧市街地。私はカフェでゆっくりしている住民の方に話し掛けた。住民の方はフレンドリーで、中には漫画で覚えたという日本語をしゃべってくれる愉快な方もいた。ニースの郷土料理や、有名人、お勧めの場所など、地元の人しか知らない情報までも知ることが出来た。

丘の上から

ニースで忘れられない場所がある。それはニースの海岸、市街地が一望出来る、「colline du chateau」（城跡の丘）からの景色である。今まで見たこともないような奇麗なブルーの海、カラフルな街並み、そして照り付ける太陽が反射して海が輝く景色はまるで絵を見ているかのような絶景であった。



Colline du chateau からの景色

仲間との出会い

フランスで過ごした期間、世界各国に友達を作ることが出来た。その理由は、毎週クラスに新しいメンバーが入ったりとクラス編成が変わったり、学校のアクティビティーを通し、クラスを超えて友達が出来たことにあった。国は、スペイン、ドイツ、スイス、チェコなどとさまざまだ。更に、ホームステイ先の仲間の存在も大きかった。五週間で計六人と交流することが出来た。全員が顔を合わせ、その日の出来事を話すのは夕飯の時間であった。私は最初、マダムとその友達の会話を聞く側で、自分から話すことはほとんどなかったが、ベルギーの女性と出会った第四週目に転機が訪れる。仏語を使うことに対する違和感がなくなり、自然に相手に自分の意見を伝える、言葉で表現することが出来るようになっていたからだ。マダムとベルギーの女性と私の三人で、

たわいもない話をしたり、お互いの国の疑問に思うことを質問し合った夕飯の時間は、何とも有意義だった。会話に加われ、話の内容を理解出来、初めて心から楽しいと感じた。この数週間、家で授業の復習をし、ボキャブラリーを増やし、マダムと日常会話をして学んだことが報われたと感じた。

デンハーグ

ニースを出発し、次に向かったのはオランダのデンハーグ。アムステルダム空港から、電車で三〇分の所に位置し、政治の中心都市として知られる街である。私は、女王の宮殿の近くに位置するホテルに四泊した。旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所の訪問では、ここで働く日本人職員のお二方、大西氏、河島氏とも会う約束をしていた。彼女たちは、ここで裁判官の補佐をする仕事を七、八年ほどなさっていた。お仕事に就くまでの経緯、仕事の内容、仕事のやりがいや苦労などをインタビューした後、将来のやりたいことが明確に定まらない私はアドバイスをいただいた。更に彼女たちは、法律を使った国際的な仕事に就く日本人が極めて少ない現状に対し、日本人の勤勉さ・まじめさが仕事をするうえで必要であり、日本の良いところをもっと国際的な場に生かすべきであると指摘し、日本の更なる国際進出を切望していた。また、日本の「死刑制度」についての意見を聞くことも出来た。大西氏は、感情論では死刑制度に賛成ではあるが、冤罪の可能性はなきにしもあらず、中間の立場だと話された。対して、河島氏は実際に人を裁ける立場の者だけが感じる、実際に生じた事実と法的に書いた事実の違いが存在し、人間が下す判決がいつも正しいとは限らないと話された。仮に免罪であっても死刑が確定されれば、取り消すことは難しくなる。それ故、反対の立場であった。

最終日は、国際刑事裁判所のツアーに、ほかの団体に交ざって参加することが出来た。従業員の方から館内の説明を受け、裁判の傍聴も出来、貴重な時間となった。

留学で得たもの

一番の成果は、仏語の会話力がついたこと。留学前はほとんどしゃべることが出来なかった仏語が、帰国後には日常会話程度までしゃべれるようになったことだ。語学学校で勉強したこと、フランスでの生活を通して語彙力がついたことが生かされているのだと感じている。しかしそれに加え、もう一つ学んだこと、それは失敗を恐れずにたくさん会話をすることだ。話す機会をたくさん設けることで、話すスピードにもだんだん慣れ、聞き取ることに抵抗がなくなった。更には、恥を捨てて仏語を使い続けることも重要である。今まで海外渡航経験が全くなかった私にとっては、現地のフランス人を目の前に仏語で会話することに対して、最初は恥ずかしさがあった。しかし、ホームステイ先のマダムは私が間違って話しても、何を言いたいのか理解出来るまで話に付き合ってくれた。それを機に、間違って話すことが恥ずかしいことではないと学び、同時に相手が外国人であっても、動じずに会話出来るようになったと感じている。そのように自分自身が成長したことで、帰国後は中大で学んでいる交換留学生との縁に恵まれた。特に仏語を母国語とする留学生とお互いに教え合うことで、日常的に仏語を使う機会が増え、とても充実した日々を過ごせている。

感謝

私は今まで、約一年の年月を掛け、こんな大きな計画を成し遂げたことはなかった。「やる気応援奨学金」に出会えたことに感謝をしたい。留学以降はフットワークが軽くなり、興味あることにはジャンルを問わず挑戦するようになった。以前は挑戦する前に限界を決めてしまう、そんな自分であったと思う。しかし「やる気応援奨学金」は、あきらめずに努力をすることが目標達成につながること、失敗を恐れずにチャレンジ精神を持って物事に取り組むことの重要性を教えてくれた。自分の自信にもつながった今回の奨学金に大いに感謝している。

最後に、行動計画の相談に乗ってくださった先生方、先輩方、最後まで応援してくれた友達、そして迷惑を掛けた家族、祖父母に心から感謝をしたい。